婦人と新社會

山田わか主筆

三月號

□最近婦人論の傾向

□新聞と責任

□インタナショナルとしての婦人

産兒制限論の嚴正批判

産兒制限とマルサスの惡魔

産兒制限は人類を動物化す

□精神的發達に於ける性の役目

□現代的婦人の標本

□子供の唄

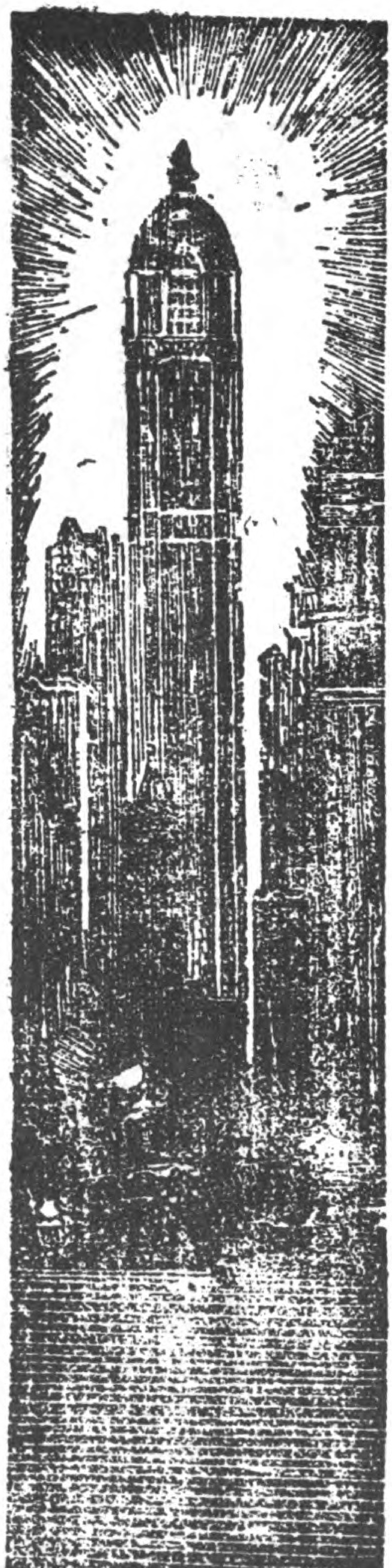
每月一回一日發行　第二拾五號　大正十一年三月一日發行

大正十一年二月二十三日印刷納本

最近婦人論の傾向

そも〳〵婦人問題と云ふものに私が意を留め始めた時分には「一體、女の歩む道は何だろう。女と生れたことは女自身の罪でもないのに、女は實に情けない運命の下に置かれてある。この運命から脱するためには女も男と同じ道へ出たものか？それとも其の運命に甘じて今迄通りにして居たものか？」と云ふような處に婦人問題はまご〳〵してゐました。處が、其れから三四年が經過するうちに、「女も人である。男と同じ道に進まねばならぬ」と云ふ意見が大浪のように起つて浮足になつてゐる婦人思想界を押し流そうとしました。其の時です。私は持つたこともない筆を執つて、「否、それは間違つてゐる。女には女の歩む道が別にある。しかも、女としての所謂運命に服從するのでなく、婦人本來の運命を開拓するのだ。」と私の最初の一聲を擧げました。

以來十年が經過しました。そして、今日に於ては、病的に過激な思想を除く外、新聞に雜誌に現れて來る眞面目な諸大家の婦人論の方向はほゞ一致して來た觀があります。そして、其の方向は、私が今日迄主張して來た思想の裏書きです。唯、私の貧弱な文字、下手な文章の代りに、其れは文字が豐富で、文章が流麗です。私は此の傾向に大きな喜びを感じてゐます。



新聞と責任

——新聞の良心——

今日の社會に於て新聞紙は三度の食物と同じように私共の生活にとつては無くてならないものとなつてゐます。私共の肉體に食物を斷つたことが出來ないように、新聞と云ふ精神上の食物を私共は一日も斷つことが出來ないようになつてゐます。それだけ、又、新聞紙の責任は大きくなつてゐるのでありますが、さて果して、新聞が其の責任を感じて居るかどうか？　隨分いゝ加減な勝手な報道を見せられて新聞紙の良心と云

ふことに付て考へさせられるのは恐らく私許りではないでせう。其れに付てミシガン大學のロイド敎授が面白い議論をしてゐますから次に擧げて見ます。

或る皮肉な著者が『自然』と云ふ題で私共の五官に觸るゝものゝ一切を論じたことがありますが、其の著者は其の『自然』と云ふ題に『無存在』と云ふ小題をつけて置きました。で、今、此處に新聞の良心と云ふことを考へるに當つて、此の『新聞の良心』と云ふ問題には矢張り『無存在』と云ふ小題を付けて置くことが適當であるように思へます。勿論、良心と云ふことは其の定義如何によつて其の意味も亦異つて來ますが、併し、此處で云ふ良心は因習的な良心でもなし、又、難しい哲學的な良心を云ふのでもありません。

一體、新聞は今日の普通一般の生活と同じように非常に動搖してゐます。つまり、常態でありませんから其の良心を問ふたり、制裁に付いて考へても其れは無駄な努力に終るかも知れません。實際、新聞の良心と云ふものを探して見ることは今は非常に

困難になつてゐます。一度は、其の良心なるものが出來かゝつたようでありますが、其れは、あの歐洲大戰爭が破壞してしまひました。則ち、新聞紙の責任觀念と云ふものがあの大戰以來影を潛めてしまつたのです。

今日に於ては、あらゆる生活の流れが皆新聞紙の上にあつまつて行きます。臺所の隅の事柄から、最高權威の問題に至る迄、一切が新聞紙のお世話になつてゐます。ですから、新聞紙が大勢力を持つのも無理はありませんが、併し、其の大勢力が果して世人の尊敬を受けてゐるでせうか？　信用されてゐるでせうか？　高い目的を持つてゐるでせうか？　正直で獨立であるでせうか？　眞理と正義に奉仕してゐるでせうか道德の保護者であるでせうか？

新聞紙自身が其の位置を感じて居るかどうか？　私は單に新聞紙を攻擊するのが目的ではありませんが、併し、新聞紙の良心と云ふことに關して、其の疑問とする處を少しく述べて見たいと思ひます。

そして、第一には廣告問題です。つまり、廣告の依頼人が、事實上、新聞の記事や論說を支配して居はしないかと云ふ疑問です。廣告は學生の造る新聞にですらも載つてます。そして、其の新聞の記事や、論說に影響してゐます。長い間の經驗によつて新聞の編輯人、論說記者及び雜報係りは、廣告依頼人の希望する處を、聞かなくても以心傳心に了解してゐます。そして、廣告依頼人の其の希望を無視したやうな論說や記事が紙上に現れるならば、經營上打擊を受けなければならないことを承知してゐます。資金の少ない新聞紙に於て殊にそうです。購讀者の多いことが廣告者を引きつけ廣告者の多いことによつて新聞の發展を計らうとして居ることは新聞界の普通事であつて、これは新聞紙の頁と頁の間に行と行の間に著しく現れてゐる事實です。

第二に、廣告は、新聞の記事を制限したり、新聞政策を左右したりすることによつて、事實上、新聞と云ふ公の機關を私のものとしてゐます。或ひは、少なくとも廣告者の商業上の目的のために新聞を保守的にしてゐます。實に、廣告料と云ふ誘惑、又

は、財政のために、其の社説迄影響を受けるのです。或る頁が如何に頑強に其の潔白さを維持しようとしても、いつかは智力的にも道德的にも、他の頁と同じ平面に墮落してしまいます。探訪者は事實を探訪しないで一ツの勝手な記事を書いてしまうし、編輯人は批評しなければならない點を巧みに避けてしまうと云ふことになります。

第三に、新聞紙は、どんなに進歩的を表面に装ふてゐても、一種特別な保守主義に毒されてゐます。そして、それは商業上財政上から來てゐます。商業上、つまり財政上權力のある人が急な變化を好まないのです。過激主義よりは保守主義の方が無事ではありますが、と云つて產業、商業、及び現存する秩序の進歩の車を止めることは出來ないので、表面は進歩的を装ふてゐますが、新聞紙上の文字と文字の間には、根本的に保守主義がわだかまつて居ます。一體、進歩は國民によつて、群集によつて、又は、指導者によつてゞありますが、精神に於て保守的な新聞は組織ある宣傳法で國民を盲目にして置きます。そして其の宣傳は社會上、政治上、乃至は商業上の廣告の別名に

過ぎないのです。そして眞の進歩を促そうとする眞の指導者の仕事を妨害します。

或る人は新聞紙の保守主義は喜ぶべきだと云つてゐます。勿論、もし、過激と保守とどちらを選むかと云ふならば、保守の方が無事であります。けれども、新聞紙の保守主義の惡い處は何處にあるかと云ふならば、虚僞の動悸に動かされることでありす、其のために二重生活をすることになります。産業に關し、政治に關し、表面は何であらうと裏面に於て過激で又は革命的でないと云ふ處は結構ですが、併し、其の保守主義が、劣等な人間性を利用したり、記事を商業化したりすることによつて、保守主義の美點が抹殺されてゐます。つまり、露骨な人間の本能を誇張することによつて保守主義を惡用してしまいます。

第四に考ふべきものは、事實を貴ぶと云ふ名の下に、人の祕密を無暗みにあばくことです。新聞記者達は申ます。社會は其れを知る權利がある、そして、其れを公表することは社會を保護することである、と。ですから彼等は人の祕密のうちに最も無遠

處に割込んで來ます。併し、社會が、他人の內部生活を知らねばならぬ場合ひは、其れを絕對に必要とする時です。そして、其の場合は必ず間違ひのない處を知らねばならぬのです。けれども、新聞紙は餘まり度々其の義務を果しません。新聞紙は餘まり度々どうでもよい、社會には何等の影響のないものや、又は、不正確な事實で紙面の大部分を埋めて居る時があります。又は、其の發表の仕方が餘まりに感情的で失敬です。社會が正當に知らねばならぬものを知らせない許りでなく、社會に必要な改革、又は、制裁の妨害になることがあります。

新聞紙は、又、スツパヌキをもつてチガラとして居ることがあります。つまり、敏捷な發表と云ふことを生命のようにして居ると云ふ傾きがあります。けれども、唯、早いと云ふこと許りでは有効でも亦尊敬に價ひするものでもありません。つまり、公衆が知らねばならぬことを敏捷に、そして、正確に報道することによつて新聞紙の偉大な力が尊敬されます。

第五に。新聞紙の良心と云ふことに付て、多くの人を失望させる處のものは、新聞紙が群集によつて支配されてゐると云ふ事實です。一體、良心と云ふことに付ては如何なる定義があらうとも、其の良心の持主は責任ある個人でなければなりません。けれども、新聞紙は今日に於ては、獨立の狀態にあつてそして責任を持つ個人によつて編輯されて居ません。今日の編輯人の位置は、いはゞ考へることと書くことを別にしてゐる著者のやうなものです。編輯人や探訪者は自分自身の正直な經驗や、判斷や、獨立の思想を働かせると云ふよりも、むしろ、自分の這入つて行く環境に支配されてしまつてゐます。云ひかへれば、新聞紙の思想は獨立の思索の代りに機械的の思想になつて居るのです。

最後に考へなければならないものは、新聞紙はありきたりのものを嫌ひ、本當の個性を無視し、常にキバツな者許りを探して居ます。一體、進歩は國民が賢く指導された時に實現するものでありますが、併し、大抵の新聞はスツパヌキを敢へてし、組織

ある宣傳法によつて國民を盲目にし、本當の意味の指導者の仕事を妨害します。つまり、今日の新聞紙の最惡なものは本當に立派な人の個性を迫害して、或ひは無視して輕浮な人間が讃美される道具となつてゐることです。

要するに、今日の新聞紙と云ふものは、第一が商業主義、第二が迎合主義、第三は虚僞な動悸によつて動く保守主義、第四は偏頗な愛憎をもつての報道、第五には常に募集に使用される機械であり、第六には本當に眞面目な人物、實際の指導者が馬鹿にされると云ふことであります。

そして、つまる處、此れは半眞理の研究と云ふことになります。全眞理の研究は數學にのみ屬するもので、生きた人間の事柄に關しては半眞理に於てのみ議論されるものですが、併し、多くの人は其れを認めません。如何なることも、全然惡いものも全然善いものもなく、金でも法律でも、又、自我と云ひ、性と云ひ、冒險と云ひ、皆、兩方面をもつてゐます。要するに半眞理と云ふことになります。

ですから、前に數へ上げた新聞紙に對する六ツの批難も、亦、其の半面には六ツの善いことがあるかも知れません。けれども、私共は實際上の價値を貴みますから、主觀的には如何なる善があつても客觀的に害を殘すものは排斥しなければならないのです。

もし、新聞記者が此の一文を讀んだならば、此の文中に擧げた事實は半眞理に過ぎないと云つて、勿論、新聞の良心の存在に關しての證據を擧げて來るでせう。新聞にたづさはつて居る多くの人のうちのさう云ふ人には新聞事業を託して置いても安心です。さう云ふ人はいつかは新聞紙を理想化し、新聞紙の良心を發揮し、其の價値と奉仕を明らかにするでせう。勿論、新聞のしてゐる仕事の一ツ〳〵を切り離して見るならば中には善いこともあるに相違ありません。併し、全體として見た時には遺憾ながら前述のような缺點を擧げなければならないのです。

で、今、新聞記者諸士に對する希望は、望ましきものと認められた可能性を實現し

ようとする義務觀念を持たれることです。そして、新聞社の各機關の完成と相待つて新聞記者自身の敎養、新聞記者の有力な新團體の發生と共に、新聞紙の良心が其の一小部分に存在することの代りに全部に行き渡るように努力されることであります。云ひかへれば、良心のある新聞とは義務觀念と勇氣とを持つて、今日迄の新聞紙の缺點を實際上の道德に變更することです。それが啓蒙されたジョーナリズムであります。

□□□□□□□□□□□□□□□□

性と精神的進化の關係

□□□□□□□□□□□□□□□□

生物界には何故に、男性女性と性の別があらねばならぬかと云ふことは久しい間、科學界を苦しめてゐた問題です。そして、其の解決は今猶一世紀以前と大差ありません。胚種細胞の構造だの發達に關しては多くの著しい發見がありました。其の結果、

私共は性に關する一般生物學を學びました。そして、有機界に於ける性の進化に關する幾分かの智識を得ました。同時に性に關する問題に付ては可なりの進歩がありました。

けれども、どうして男性女性が出來たかと云ふ問題に關して、云ひかへれば、なぜ生殖には男性と女性との結合がなければならぬか？　下級生物には性別がなく、從つて、交接と云ふことがなく、各自が或る程度迄、成長すれば二ッに割れ、二ッが四ッに割れ四ッが八ッに割れると云ふ方法で、つまり、分裂繁殖を行つてゐるが、なぜ、自然は其の方法を何處迄も延長しなかつたろう？　男性女性と云ふ性別を造つて複雜な問題の種を蒔かないで、凡てを同一性にして置いたならば面倒がなくてよかつたろう。と云ふ疑問に關しては、唯、專門家の假說的な說明を聞くのみです。又、無性の狀態から性別が現れた原因に付ても不明でありますが、併し、性別のあることが有機界の進化にどんなに利益であつたかと云ふことは明らかです。つまり、有機界の進化

は性に別のあることが根本要素となつてゐます。

複雜な構造を持つてゐる有機體の多くは胚種を統一させることによつて出來てゐます。たとへば、立派な花のかたちや、美しい其の色や、芳しい香ひは、もし、花に雄性雌性と云ふものがなく、かけ合せと云ふことが行はれなかつたならば出來なかつたでせう。それは、もし、植物が無性であつたならば到底得られない効果です。

或る動物は其の雄性細胞を水の中へ放出して置いて雌性細胞との結合を機會に任せて置くそうですが、大抵の有機體、殊に、高等動物に於ては、雄性雌性を結合させるために巧みな機關が存在してゐます。其の巧みな構造と相待つて、又、異性を求める本能が複雜な行爲によつて現はされます。そして、其の感覺や複雜な行爲は異性との會合を全からしむるために發達したものだと云はれてゐます。たとへば土龍の大きな觸角、雄蜜蜂の大きな目、雄蚊の鋭い聽覺を持つた耳など、或ひは、又、蟋蟀・螽斯蟀などの音聲は、皆、異性との會合を求むる方法に過ぎないのです。

動物の生活のうちで生殖のための活動は、最も複雜な作用として數へられてあります。勿論、同類が他の種類の動物と區別されてあらねばなりません。そして、逼ひかけたり、捕へられたりすることが生殖を行ふための第一の準備であらねばなりませんそして、此の活動があらゆる生物の感覺の進步、力の發達、心理的の進化となつてゐます。たとへば、甲殼類の異性を求むるための活動、蜘蛛の求愛、雄鳥が雌鳥を求むる稍一層巧みな活動、又は、魚類が卵を生む習慣の如き、それ等は性別があるために刺戟されて發達した行爲です。

これ等の例は餘まりに有り來りのもので、生物學者でなくても誰でも知つてゐる事實ですが、併し、性に別があると云ふことが如何に彼等の行爲の進步發達を促す刺戟となつたかと云ふことは興味ある問題です。同時に、其の間接の結果として、心理的に進化を起したと云ふことは見逃すことの出來ない重大問題です。

行爲の進化に於ては、一ツの本能が他の本能から成長します。それは、丁度、前以

て存在してゐた構造が一層巧みになつて、其處に新しい機關が創造されるのと同じです。たとへば、或る範圍に屬する活動に關する本能的の反動が一般に巧みになつて、そして、他の範圍に屬する活動に關して其處にもつと複雜な、專門的な行爲を設定する基礎となります。具體的な例をとるならば、有脊動物の音聲の第一義的の作用は異性を呼ぶためでありました。けれども、後には第二義的の作用、則ち子を保護するために用ひるようになり、又、其の後にはいろ〳〵の本能的な呼び聲を發達させて、同類のものに警報を與へる手段又は交通の手段とするようになりました。

人間の場合ひに於ては、最初は單なる本能的な呼び聲であつたものから言語となり音樂となりました。音聲の進化は心の進化に關して非常な結果を生み出して居るのでありますが、其の元來は單に性の別の聲であつたのです。ですから、音聲と云ふものが、有脊動物の交接のために有効に使用されるでなかつたならば、音聲の進化は無かつたかも知れない。そして、人間は人間になり得なかつたかも知れないと云はれてゐ

ます。

生殖を目的として行はれた感覺の分業化が、多くの本能を精選する基礎となつたと云ふこと、及び、性的本能と他の本能がどう云ふ風に反動し合つて相互を發達させたかと云ふことを詳細に知ることは出來ませんが、併し、動作の進化の上に、異性の力が如何に大なる感化力を持つてゐたかと云ふことは明瞭です。

其處で、人間の場合ひに於ても、男性と女性と性が二ツあることが心の進化の唯一の力であつたと云ふことは出來ないかも知れませんが、併し、これが人間の精神の力の一大要素であつたことは明らかです。異性の牽引力が感覺を鋭くし、活動を促し、冒險を試みさせ、戰鬪力を鼓舞し、そして精神の力を發達させる不變の動力であつたことは確かでありませう。



産兒制限は人類を動物化す

一

無一物から艱難刻苦して、ツイに一家を持つ用意が出來た人が、本當の家庭生活の樂しさを知り、家庭の神聖を保たうとする慾求が熾烈であるに反して、生れながらに自分の家、自分の財産があつて不自由と云ふことを知らず、ものを造ることがどんなに苦勞であるかと云ふことを知らない人程、家庭生活の樂しさを知りません。從つて、家庭の神聖などと云ふことを念頭に置いて居ません。

ですから、自分で家を造つた人の生活も、亦、親に家を造つて貰つた人の生活も、外形は同じですが、其の内容には雲泥の差があります。そして前者が根柢の深い、樂しい、從つて社會のためにも有

益な生活を營んで居るに反して、後者は浮草のやうに不安定な、悶着の多い、從つて、折々社會に害毒を流すような生活を營んでゐます。

男女關係も亦其れと同じ道理で、異性を求むる情が胸のうちに湧しても、また自分は人の配偶者となる價値がない、親となる資格がないと考へて、奮勵刻苦してゐるうちに人格は向上し、戀愛觀は高會になります。

何事でも、結果其のものよりも、其の結果に至る道程が有意義です。又、其の道程の如何によつて其の結果の價値も定まります。これは一度本誌上で云つたことですが、生理的に結婚し得る年頃になると直ぐ考へて見る時間も持たず少しの苦心もせずに結婚生活に入るならば、結婚生活の意義も價値も樂しさも使命も知らずに一生を過すと云ふことになりませう。これに反して、生理的には其の慾求があつても、經濟的に精神的に其の資格無しとして、修養に勵み腕を研いて居るうちに戀愛は神聖化され、結婚の意義も明瞭になつて來るのです。今の處、あらゆる點に於て女は男に劣つて居ますが、そして、こうなつた原因はいろ〳〵ありますが、其のうちの一ッは、男は結婚するには相當の資格を先づ造らなければならなかつたのに反して、女は其の年頃になりさへすれば直ぐ結婚生活に入つてしまつたからだと思ひます。

處が、今、騷がれてゐる産兒制限則ち

避姙法の宣傳は、精神的の發達に必要な過程則ち肉慾の抑制と云ふことを無みしてしまはうとする、つまり、人間を餘まりに動物的に取り扱はうとするものです。肉體は精神によつて支配し得ると云ふ人間的價値を無視して、人間を肉慾に隷屬させようとするものです。

現に亞米利加に於ては年々百萬から二百萬の墮胎があると云はれてゐます。墮胎は母體の生命を危ふするものであり、そして、犯罪行爲だと云ふことは誰でも知つて居ます。其の犯罪と危險を犯して迄も本能の滿足を得たいと云ふのが今日の大多數の人間です。ですから、もし、少しの苦痛もなく、犯罪にもならずに本能を滿足させる方法が許されるならば性の亂用はどんなになるでせう。そして、精神的向上と云ふことは地を拂つて、人間は益々貧弱になり動物的になつて行くでせう。

無制限に肉慾を滿足させようとすることは人間の精神的愛を無視したものです。精神と肉體とを切り離した考へですそして、其の犧牲となるものは大抵の場合女性です。例外はあつても原則として女性は精神的愛の所有者であり、男性は肉的愛の所有者です。性的關係の結果に付いて全く責任を負はされない男子が其の肉的愛を無制限に滿足させる結果は必ず女性の精神的愛は蹂躙されます。愛の死骸となつた氣の毒な婦人の數は今日に於てさへ隨分少なくないのですが、避姙

法が許されるならば、さう云ふ婦人の數は今の四倍五倍或ひは十倍にもなるでせう。

産兒制限は婦人が男子の玩弄物になるには最も都合のよい工夫です。

二

サンガー夫人の『産兒調節論』のうちの一節に、『……婦人の殆ど凡ては、次の如き一般的二分類中の何れかに屬する。即ち其の一は自己の意志に逆つて已むなく子供を生む婦人、其の二はさうした害惡を免れるために墮胎の方法を取る婦人である。つまり、重荷に苦しむ母となることを續けるか、それとも忌はしき非人道的な苦痛多き、而も往々恐るべき危險の伴ふ手段を取るか、其の一を選まなければならなくなつてゐる。前者のグループに屬する婦人は次ぎ〳〵と子供を生みながら、而かも子供が死んで生れる事を望み、或ひは、生きて生まれても早く死んで呉れたらと望んでゐる狀態である。後者のグループに屬する婦人は、自由を希ふ女性的精神が强烈である餘り墮胎の罪惡を選ぶ樣になつた婦人であつて、積極的に外科手術を受け、而かもこれを以て、自己にとつても、既でに生れてゐる子供達にとつても却つて幸福であると考へてゐる。』とありますが。

成程、廣い世間には子を呪つて居るような不幸な婦人もあるでせう。又、經濟的獨立と云つて男子に反抗し男子の生活を模倣することが唯一の人間らしい生活

であると考へ其のために子供を邪魔にするような婦人もあるでせう。けれども、其れを以て、婦人先般の意向であり、全婦人の希望であるように云ふのは、おかど違ひを通り越して抱腹絶倒です。

　子を呪つたり邪魔にしたりする婦人は全く例外であつて、一般婦人は我が子の健全な發育を希つて千々を心に碎いて居ます。我が子の幸福のためには自分の生命を縮めることとすら厭ひません。『燒野雉子夜の鶴』と云ふ言葉は千古不變の人情を現したものです。又、經濟上政治上の完全な自由をお前にやるからお前の子供を全部これから生む子供をも、お前の手から離せ、と云はれた時に、『イ、エ、自分の子供を自分の手で育てようと思へば

こそこれから生む子供も健全に育てようと思へばこそ經濟上政治上の權利が必要ですが、それとこれとを取り替へる位ひなら、そんなものはいりません。名は奴隸でも低能者でもかまいません。愛する我が子に取り卷かれて居る方が私のためにも子供のためにも幸福です。』と云ひ切る婦人もありませう。

　けれども、病人許りを扱つてゐる人は世界中の人間が皆病人であるように思ひ込み、罪人許りを扱つてゐる人が世界中の人間を皆罪人であるように思ひ込むと同じようにサンガー夫人も不幸な結婚不幸な親子許りを見て、其れが世界全般だと思ひ込んで、幸福な結婚、子の愛に人生の喜びを感じて居る人々が外にあるこ

とを見ない、否、見ても自分の工夫した說を押し進めるために無視してゐるのです。

　實をよくするために數を制限するのだと云ひますけれど、成程、果實などは粒を大きくするには數を少なくしますが、併し、パンのみにて生くるものでない人間の親は、二三人の子供を立派に育て上げる資格があれば五人でも六人でも育てます。けれども、親としての價値のない人間は六人七人は愚か一人か二人でも子供を優良なものにすることは出來ません。要するに子供の數の問題ではなく、親の資格の問題です。

　優良な人間ならどんなに數が多くても差し支へありません。其の一人々々が何かしらを造り出します。ですから、產兒を如何にせば制限出來るかなどと云ふことに精力を費してゐる暇に、如何にせば生まれるだけの子供を幸福に優良に育て得るかと云ふことを考ふべきです。今日の問題は物資の缺乏の問題ではなく、物資の無駄を防ぎ如何にして有益に利用すべきかゞ問題です。同時に資在觀念の問題です。

　大多數の人間が責任を感ぜず、道德的節制をせず、貧乏を心にかけないで平氣で人口を增加させ多くの禍を釀して居るのに對して、それ等の無責任を矯正しようとはせず、避姙の智識を授けて產兒を制限しようとすることは、人間の向上し得る性質を無視した短見です。其れは、

やがては一人前になり得るがまだ、幼稚な、金の使ひようも、造る方法も知らない子供に財產を託すのと同じことです。

三

產兒制限論は今より百年程以前、マルサスが公にした人口論に其の出發點をもつてゐます。則ち、食物の增加よりも二倍の速度で人口は殖へて行くから無制限に子供を生んでゐるならばツイには人間の食ふものが無くなつてしまう。其處で、自然は人口の無限の增加を阻止するために時々役病を流行させせり、戰爭を引き起させたり饑饉にしたり、すると云ふのであります。

人間の生活に必要な物資が算術的にしか增加しないのに、人口の增加は幾何學的に增加して行き、そして、しまいには此の地上が狹ますすぎるようになると云ふのでありますが成程人口は其の比例の如何を問はずだん／＼增加して行くに相違ありません。けれども一體此の地球は以前は火の球であつたのが漸々と冷却して生物が生息し得るようになつたのだから、やがては、我々人間が生きては居られない程度に迄冷却してしまうであらうと云ふことは理窟には相違ありませんが、併し、今日の私共が其れを心配したり考へたりする必要はないでせう。地上はいつかは人間が住む處がない迄に狹くなると云ふことも其れと同じで今日の私共にとつては餘計な心配であらうと思ひます。

私共は目前の事柄に關して最上を許り最上の努力をして行けばよいと思ひます。で、目前の事情に付いて考へるなら

ば、今、突然に人口が二倍又は三倍になつた處が此の地球上に存在する物資、又は月々年々產出される物資は其の人口のために足りないと云ふわけはない。現に存在してゐる物資が、どの位ひ有効に使用され、どの位ひ無駄になつてゐるかは正確には分らないとしても莫大な無駄があることは事實です。ですから、今日の人口問題、貧乏問題は物資の缺乏から來て居ると云ふよりも、むしろ、分配の不公平、一方の浪費が原因になつてゐると思ふのです。物價の暴騰は、果して、人口の割りに物資が少なくなつたのであるかどうか？　人工的な策略が加はつてゐないかどうかも大いに研究して見る餘地があります。

　レーアド氏が云つて居る通り（マルサスの暴說參照）人間の生活に必要な物資は食物燃料、衣服でありますが、其の食物となる魚類鳥類家畜、又は、穀類は人爲的の妨害がなかつたならば、人口の增加よりも、もつと、著しい比例で增加して行くものです。衣服に付いては、今日の處、實用的に材料を有効に利用して居ると云ふよりも、無駄にして居る方が遙かに多からうと云ふ觀があります。一人の貴婦人が年々費す贅澤な被服料は何百人何千人の貧乏人を寒くなくすることが出來ませう。とにかく、今日の科學の發達、產業上の革命、農業の進歩を見なかつたマルサスが百年前に公にした人口論を基礎に產兒制限、則ち、避妊の實行を高唱することは誠にいはれのないことであります

　要するに、サンガー夫人の避妊宣傳は抑制しなければならない本能の跋扈を奬勵し、人間的價値を下落させ、そして、人種的自殺を促すものであります。



『インターナショナル』としての婦人

軍備縮少のための華府會議には四人の米國婦人が顧問として出席したが、其の裏面には多くの國々の婦人の數年間の努力の結果其の國々の婦人と婦人との間に細い網の目のやうな關係が出來てゐた。

婦人は偉大なる情操の製造者である。彼女等は各國の婦人團體を通じ、又は、其等の團體が發行する印刷物を通じて、世界中の國民の精神上及び智力上の特長や又は政治上の實狀などに關する報告をあつめたり、傳播したりしてゐた。

上海にも一ツの婦人倶樂部があつて、勿論、此の倶樂部が各國の婦人との意見を交換してゐたのであるが、此の倶樂部から發せられる問題は、最早、支那婦人の足や阿片の問題ではなく、主もに支那の藝術や特長の發表であつた。

布哇の婦人倶樂部の代表者はつとめて各國の婦人に面談した。そして、話題となつた主もなるものは、市民としての修養、よりよき教育上の便宜と云ふことであつた。要するに布哇婦人の進歩向上の

ために、より完全なる諸制度を要求すると云ふことに付てゞあつた。

瑞典、佛蘭西、土耳其、ジョージア、波蘭、クリミア等の婦人團體から、米國の婦人團體の首領に、常に通信があつたそして、それは婦人に關する特種の事柄に付てゞはなく、米國政府の政策、又は各州の法律、乃至は、米國々民の團體行爲等に關する質問が重もであつた。

米國婦人を中心としての諸國の婦人間の通信は、それ等の國々に一ッの輿論を造ることになり、それが國際關係に影響を與へ、ツイには其の力を其れ〳〵の政府によつて認められるようになつた。其の結果、メキシコ政府は、メキシコ獨立百年祭に當つて、米國婦人總同盟俱樂部へ招待狀を送つた。五人の婦人を名譽の客として招きたいと云ふのであつた。總同盟俱樂部では五人の代表者を送つたが彼女等は十六日間メキッコ政府の歡待を受けた。彼女等をあらゆる公共事業の視察に案内したり、政府の役人と面談させたり、メキシコ政府はあらゆる方法を盡してメキシコの實狀を彼女達に知らせようとした。で、いよ〳〵彼女達がメキシコを出立するにのぞんで、彼女達は俱樂部は如何にして組織すべきか、又、各國の婦人團體との聯絡は如何にして造るべきかと云ふことをメキシコ婦人に敎ゆべきことを政府から要求された。

ジエネバに於ける婦人會議

國際婦人參政權同盟の大會がジエネバに開催された時に、凡て、十二ヶ國の政府が政府の代表者を其の會に出席せしめたが、これは、政府が婦人の國際的活動を重用視するようになつた證據である。此の大會には三十一ヶ國の婦人が一堂に會して數日間意見の交換をした。會議の表面上の目的は其の後二年間の運動のプログラムを造るのであると云ふのであつたが、實際には、如何にせば各國民間により〻き關係が永久に設定されるかと云ふことであつた。

各人の一國民として正しい行爲を爲さねばならぬ責任、國際關係を圓滑にするために、一國の政府を完全にする仕事の第一步として隣國の政府を完全にすることの必要と云ふことが幾度も〳〵力說された。獨逸政府の代表者マリー・ストリット夫人は云つた。『獨逸が、今、現に出してゐる婦人議員の數だけ、常に婦人議員が出てゐる以上は、少なくとも獨逸に於ては今後戰爭問題は起りません』

日本からの代表者、ガントレット恒子夫人は次のように云つた。『私の小さい頭は此の國際關係と云ふ問題を摑むには餘まりに貧弱です。けれども、私共日本人が正しく考へ、正しく處することを學ぶならば他國民が我々日本人をより多く好くようになるでせう。私は此のことを日本へ歸つて我が國民に話すつもりです。』

此の會議に於て、最も著しく目立つたものは南米の婦人が北米の婦人との今迄

よりは一層親密な關係を結ばうとする熱心さであつた。そして、南米ブエノス・エーアス大學の教授ブランヒルダ・ウイン女史は云つた。「米國南北の婦人が確實な永久的な關係を結ぶことによつて、南北米は親密になることが出來ます。兩國の圓滑な關係には婦人の力が主もなるものであります。南北兩國の婦人か相互を理解し合ふならば兩國間の經濟問題及び外交問題は其の解決が非常に樂になるに相違ありません。」

又、ウルグー政府の代表者ポーリン・ルイザ博士も亦西半球に於ける婦人達の强固なる結束を要求した。そして、彼女等は『汎米國婦人會議』に加入すべき用意が出來てゐること、及び一九二三年にはキャット夫人を主もなる演說者としてブエノス・エーアスに大會を開く準備の出來てゐることを宣言した。

汎米國婦人會議

米國婦人有權者同盟は、より直接な行動に出るために、本年四月二十日から二十九日迄バルチモーアに於て、汎米國婦人大會を開催することになつてゐる。そして、國務卿ヒューズ氏、商務卿フーバー氏、汎米國同盟會の主事ロー博士が其の大會の準備のために婦人有權者同盟に力を合せて居る。

此の大會に代表者を送るように、南米及び中米の政府に招待狀は既でに發せられた。外交官の手を通じて。此の大會は

キヤナダもメキシコも皆含めた完全な西半球全體の婦人大會となすつもりである。

此の大會を機として、北米を訪ふ南米の婦人達をもてなす準備は既でにとゝのつてゐる。バルチモーアに於ては市長ブローニング氏が接待係りとなる。アナポリスに於ては知事リッチー氏が接待するブレンマー女子大學に於ては校長トーマス女史が彼女等をもてなす。米國首都ワシントンへ案内して、白亜館、汎亜米利加ビルヂング、國務館を見物させ、そして、諸外國の大使館へ案内する。四月二十四日の晩はバルチモーアに於て大晩餐會を催し、國際的親密に關する演説がある。

ブレンマー女子大學の女學生許りでなく、南米及び中米から勉強のために北米へ來てゐるスミス、ウエルスレー、ラッドクック、コロンビヤ、バッサーの諸大學、及び、イリノイスのフランセス・シヤイマー大學の女學生達が皆非常な興味を此の大會に注いでゐる。其等の女學生が皆此の大學に招待されてゐるのである其の外、南米及び中米から來てゐる婦人の教師又は研究家達も女學生と同じように此の大會へ招待されてゐる。

婦人有權者同盟の會長パーク夫人が此の大會の議長になる。此の會議に於て、特別に興味のあることは、合衆國の政府に奉職してゐる婦人の役人が主催者となつて、各國婦人の智識の交換會である。

たとへば、兒童の幸福に關しては、勞働局兒童課の課長グレース・アボット孃が主催者となり、教育問題に關しては內務省教育局幼稚園課のジュリア・アボット孃が主催者となり、職業婦人に關して勞働局婦人課の主事アンダーソン孃が、賣笑防止に關しては社會衛生局の書記バーカー女史、婦人の政治上の位置に關しては司法省檢事補ウィルブラント女史が主催者となることになつてゐる。

最後に、國際婦人參政權同盟の會長キヤット夫人の主催の下に婦人の政治上の位置に關して別に會議が開かれることになつてゐる。

編輯の後

今年七十になる人が今年のような寒さは始めてだと云つてゐます。北方に住む友からは雪に苦しめられてゐる便りがありました。東京は雪で苦しめられるようなことはなかつたのですが、あの極度な寒さのために病人が澤山出來たようです。皆樣のおうちでは如何でしたか御案じしてゐました。私のうちではかはる〲風邪のために床に付て、私は久しぶりで炊事に忙しい思ひをしました。其の上旬に私も亦床に付きました。私の都合によつてはいつでも主人が臺所に這入つて行く習慣を見てゐる男の子二人はうち中の女の手が炊事をしなくなつた時に當然自分達がするものとして、ズン〲臺所へ這入つて行きました。

「漬物を出して切ることが出來るかへ?」と私が問ひますと「あゝ、僕衛生的に切つて行くよ。」となか〲元氣です。紺絣の筒袖に私の前掛けをして一人がお茶碗を洗ふと一人がそばで拭いてゐます。一人が「あしたの朝のお米はいくらとぐの?」と聞きに來る間に一人は米とぎ桶を出したり米櫃の蓋をとつたりしてゐました。どんな仕事でも同情から自發的にする時に其處に輝きがあります。

◎紙面の都合によつて「教育社會學」は今回だけ休みました。

現代婦人の標本

生理的に許りでなく、精神的にも私共の生活に草木が必要であると云ふことは誰でも知つて居ます。私共は草木を身邊に置くことによつて、又は、草木の繁茂してゐる場所へ行つて清新の氣を味ひ、元氣を養ひます。もの云ふ人間よりも、もの云はない草木に私共が慰められると云ふのは何故でせう。草木の生活には僞りがない、つまり、大きいのは大きいなりに小さいのは小さいなりに自然の色を保つて、氣どるではなし、衒ふではなし、如何にも赤裸々な其の姿が私共に嬉しいのです。

こう云ふ意味の赤裸々こそ本當に貴い有益なものですが、人間の場合の赤裸々の多くは其れとは全く趣きが違つて、赤裸々な表現とか告白とか云つても、實は極く濃い彩色がしてあつたり、又は、何かためにする處があつたり、或ひは又、讀んで不快の外は何にもないヒステリックな醜い安價な生活の告白が多いようです。

處で、一昨年の夏でした。私は佛蘭西のマグダレン・マルクス女史の著「女」と云ふ小說のすつきりした文章や、着眼點の鋭いことに引きつけられて一讀した時に、本當に人間の赤裸々と云ふのは成程こう云ふことだと頷きました。厭味がなく誇張がなく若い一女性の歡樂、及び、苦惱を說き來たり說き去る跡を見て、成程、これが女性の赤裸々な姿だと思ひました。同時に過去百年間、婦人運動者達が、押し込められ壓迫されてゐた女のたましいを救濟し生かさうとして心血を注

いた、其の心血の結晶がこれであると思ひました。永年の間、婦人論者達が女のたましひを腐らす最も恐しいものとしてゐた因習の舊衣を全然脱ぎ捨てた女史は『私』と云ふ名稱で最も卒直に自分の生活を叙したのであります。

普通の女性では憚つて到底口にすることさへ出來ないようなことを赤裸々に語つて、身をもたましいをもとらかすやうな甘い蜜、又は、身をもたましいをも凍らさなければ止まないやうな苦（にが）い蜜の味を其のまま表白してゐます。ですから、一面から見ると、女性の生活の全部をさらけ出してキヤンバスの上へ並べて、そして、『さて、女の本當の姿と云ふものは何んなものか？　眺めて見よう。』と云つたような小説です。で、私は、世界の文明の精華を集めた佛蘭西の、しかも、巴里のまん中に　女の舊衣のはしかけをも其の身に着けずに躍り出た此の新婦人を我が讀書界に紹介しようとして、一昨年の秋反譯し始めて昨年春やうやく出版致しました。

以來、一度、其の梗概を本誌上に書かう書かうと思ふばかりで其の意を得ませんでしたが、今回幸ひ小暇を得て書くことが出來ました。實に熱情的であつて力強く、しかも、上品であると云ふのが此の作の特長であります。女としての慎しみ、又は　謙遜と云ふやうなものをかなぐり捨てゝ、

『私の額の上に光つて居る金髪、熟した日光のやうな眞珠色をした私の顔・木の影で深くされた私の目の中の紫色の反射、私の唇のしッかりした赤い線、そして、輕い着物の下の輕捷（はしこ）いしなやかな手足、これらの立派な美しいものを恥じらう必要が何處にあるッ！』と云ふやうな態度を示し、そして

「『あの娘は美しい、自分の美しいと云ふことを自分で知つて居ないから一層美しいのだ』と私が人々に云はせて居た、あの面倒くさい假面（マスク）のやうな謙遜な風を私は投げ捨てゝ仕舞ふ、一體、自分の美しさを知らずに居ると云ふやうな女がこの世界に一人でもあるだらうか？　私は知つて居る。私は誓つて知つて居る。私は美しいのだ。私は自分に關するものゝ何によりもよく

其れを知つてゐる。彼がある計りではない、多くの男がある。多くの男達は老人であれ、乞食であれ、又は通りがゝりの者であれ、皆私の美しさに醉はされて、私の美を一息に吸ひ込んで行くではないか。私は本當に美しいのだ。』

と、誇つて居ます。又、無理解な父の家を出る時の氣持ちは憐れにも亦凛々しい處があります。

『父は火のやうに怒つた。始めに右の握拳を振り上げて、次には左の握拳を振り上げて、そして、空を毆つた。彼の顔は怒りのために脹らんで、不圖、若く見えた。始めのうちは私は父の云ふことを無頓着に聞いてゐた。父の怒りの言葉には慣れてゐたから……直きに直るだらうと思つてゐた。枝形燈架からの穏かな灯が這入つて來た。給仕女が湯氣の立つスープ入れをいつもの例(しきたり)に從つて食卓の上に置いた。彼女は叱られて居る私の横顔をソツと眺めた。眞珠色の柄のある盆は銀の洋切(ナイフ)やフオークの光や白い光澤のあるテーブル掛に反射してチラ／＼チラ／＼躍つてゐた。鉛のやうに重い苦しみが私の心の中に動いてゐた。默つてゐた無數の慾望、逡巡してゐた衝動死んだやうになつてゐた抱負がいつの間にか後から／＼起つて來た。地上に叩きつけられてゐた希望や、僞りや、歎息やが一所になつて一つの調子を違つて私の心の表面に上つて來たそして、其れが、私を惹きつける大きな鐘の音となつたが、併し、私は首に繩をかけられて引きずられてゐる獸物のやうに其の場にヂツとしてゐた。

『父は拳を振り上げて私の方へ近づいて來た。父の聲の雷のやうな響きが、私の内部の苦惱を數千の切れ／＼につん裂(ざ)いた。何にもかもを解(ほ)ぐしてしまふ電光の閃きがあつた。とう／＼私は云つた。けれども、實際には何にも云はなかつたと同じだつた。私が何か云はうとした時に、父の怒りの狂氣のやうな速さが私の云ふことを遮ぎつて『出て行け、出て行けつ！』と私を追ひ立てた。私の後に閉められた食堂の扉の音は非常に長い、非常に印象の深い響きを殘した。』

彼女は、廊下に一寸立ち止まりました。其處は電燈が螺旋狀をした階段の赤い敷物の色を際立(きはだ)たせ、手摺の眞鍮の棒の各々に一ツ／＼輝星を附けてゐました。彼

女は甘く考へてゐました。けれども、「一層のこと」と云ふやうな氣になつて、丁度、不注意に開放された戸口を見付けた囚人のやうに「逃げよう」と心の中で叫びました。因習に深く閉された安逸な生活から逃れ出ようと決心したのです。彼女は、宣言しました。

「お母さん、あなたはあなたの肩の上に二十年古い不幸をのつけて滿足して御ゐでになる。あなたの暮されてしまつた事、あなたの夢のない様子、あなたは死んでゐるのです。けれども、今の時代の娘である私達はお母さん達の眞似は出來ません。私達は感ずる胸、理解する頭腦、そして、新しい精力を持つてゐます。」と、けれども、いよ／＼父母の家を出て、何處で一夜を明かさうと云ふ當もなく、細い霙降る夜の街路がだん／＼更けて行く時に「何と云ふ身に滲みるやうな夜なんだらう。」と云ひ、又、「おゝ、自由と云ふものは夢のやうな味のものだ……」と歎息してゐます。

兎に角く、とある薄汚ない下宿屋を見つけて其處に落ち付き、そして、非常に苦心をした結果、彼女は一つの職業に付くことが出來ました。そして、自活の道を得たことを喜び誇つて見たり、其の無味單調を託つて見たりして居るうちに或る青年と戀仲になりました二人の結婚はとゝのいました。彼女の兩親は其の青年に社會上の位置、及び、金のない事が不服でしたが、それでも、結婚生活に入ると云ふことをキッカケに其れ迄の彼女の我がまゝを許し、結婚式は兩親によつて擧げられる事になりました。こして、結婚式場に送られる時の氣持ち並びに式後の感想を次のやうに語つてゐます。

『馬車の行列の最後の馬車は二人乘りで日除が下してあつた。針金で根の方を細工してある花束の香りが車の中に充滿してゐた。馬車が速かに走り去る時に私は振り向いていつ迄も後を眺めてゐた。後に殘つた處女としての記憶を書るために。……私は母の勸めに從つて餘儀なく其の假裝を承諾した。……彼女の着物のやうな衣裳に皺をつけまいとするのではない。けれども、私は無理に動かずにゐた。それは無感覺になつてゐて、少しも心を動かさずに居ようと思つたからである。其の時の私の役目は押し寄せて來る人々の目の的

になることであつた。霧のやうなベールを被つて、そて、醇化された風附きをして私は自分自身を虚飾のし位置に置してやつたのである。

『其の衣裳を脱ぐのは大仕事であつた。何百何千と云ふピンや釣子が彼處此處に隠されてあつた。……私達が部屋へ歸つた時に私達は部屋の中を眺め廻した。そして、其れが終ると彼は私を引き寄せた。私は暖かい接吻を受けた。すると、一陣の風が私の臓腑を吹きまくつたやうに私は感じた。私の筋肉が引緊まつて、體は毬のやうに縮んだ。或る不吉な恐れが私を震へさせた。彼は目を上げたが、其の時のやうな魅闘的な彼の目を私はそれ迄に見たことがなかつた。彼の顔は固くなつて彼の目は空を泳いでゐるやうだつた。私は幹から落ちた花のやうに彼から離れて倒れた。……いよ〳〵今日となる前に、私は彼を充分了解し、彼は私を徹頭徹尾了解したと私は考へてゐた。私の全部を讀み得るやうに私は彼に仕向けてゐたと考へてゐた。けれども、實は、彼は私に付いて何にも知らない。彼は私の乳房の美しい形を知つてゐない。私の足の弧線も私

の腰の周りの格好も知つてゐない。この譯の分らない體、一寸觸れても音を立てるやうな感じ易い、絶へず變化してゐる此の體を彼は知つてゐない。

『最後の信用を彼に與へればならない仕事がまだ殘つてゐる。全身を眞裸にして、そして、大膽に彼の目の前に其れを現す仕事が、まだ殘つてゐる。これが最も純粋な信頼ではないだらうか？　けれども、其れは其の時が來る迄待たなければならない。何故なら、それは全く赤裸々な豫想外な眞理を語る瞬間でなければならないので私は幾分の恐れを感じるから。……併し、私は凡てを想像することが出來る。戀人であるためには必ずしも愛されなければならないと云ふことはない。愛されて居なくとも自分の手を男の首に捲きつけて彼に抱きつく。だん〳〵強く抱きついて行く。さうすると、自分が一人で居た時の愼しみと云ふことを全く忘れてしまうことが出來る。そして、それから先きの事は何事も分らなくなる。自分と云ふことすら忘れて興奮してしまつて、默諾してしまつて樂しい〳〵夢の中に魂迄も眠らされてしまふ。……そして、も

う一歩進むことが出來る。なぜなら、抱きついてゐる肉體は虚は云はないから。男と女が抱き合つてゐる時には弱いと云ふことを武器にしたり征服されたりしてゐる女の方が强者になる。私は今から既でにそれを確めてゐる。私の無智な肉體の奥の方に、其の、相手を支配しようとする力が既でに芽ぐみつゝある。それは私自身ではない。私の生れない前から存在してゐる一つの法則なのであつて、其の法則は常に有効に働かう〳〵としてゐる。』

何と云ふ大膽な、併し、實際の表白でありませう。女性の眞味を遠慮なく發揮してゐると思ひます。其れから彼女は新婚の甘い酒に醉ふて居るのでありますが併し、彼女は前にも云つた通り、今日迄の婦人論者が造り上げた新婦人でありますから、勿論、自由戀愛の實行者です。現代の代表的新婦人でありますから、夫との間に子迄あり、そして、夫に對する愛がさめたと云ふわけでもないのに、外に愛人が出來ました。そして、其の愛人に對する氣持ちを獨言してゐます。

『彼に對する私の愛は本當の愛であつた。風の一吹きによつて吹き去られてしまふやうな不確な一時的の衝動ではない。私の愛は私の命と同じやうに私の有ち得る凡ての勝利を要求する。私に親しい凡ての人を要求する。私の眼はとり入れられるだけのものを何でもとり入れる。空でも、空の色でも……私の呼吸を禁めることは誰にも出來ない。そんならば、私の愛するものを、それが何であろうとも、私が愛することを禁めることは誰にも出來ない筈である。』と。

彼女の葛藤の多い、併し、溢れるやうな歡樂を盛つた愛の生活はあの歐洲大戰爭のために根底から覆へされてしまいました。國交斷絶、宣戰、壯青年(其のうちには彼女の夫も愛人も含んでゐます)の出征と云ふことが彼女の耳朶を打つた時の氣持ちを彼女は次のやうに云つてゐます。

『丁度、畑の端に火がついて、そして、畑の麥の一本々々が其の火を捕へて、やがて、畑全體が火になつたやうに、私達は無感覺のうちに宣戰と云ふ火を捕へて、そして、其の火のために床へ釘付けにされたやうに立ちすくんだ。眞赤に燒け爛れた瞬間、窒息させら

れたやうな呼吸、胸の中によろ〳〵してゐる魂、恐怖を通り越してぱかっと空を見詰めてゐる眼……或ひは又、私は自分の體をひッ摑まれ振り廻はされ、空中に投げ上げられるやうな氣持ちであつた。けれども、夫と抱き合つて居ることによつて幾分か私の心は落付いた。そして、夫を送り出さなければならないと云ふことを幽かに意識して來た。』

と。そして、夫を送り、愛人にも行かれた後の獨身生活に付いて、（彼女は結婚後も職業を持つてゐましたから子供は里子にやつてあります。）『私はからッぽうな部屋の中にたつた一人で居ることに恐しい程慣れて來た。壁が佛頂面をしてゐることや、啞のやうな無聲や薄ぼんやりした燈が氣にかゝらなくなつた。私の心はそれ等に取り卷かれてゐることを曖昧ではあるが納得した。習慣は非常な力を揮ふものである。獨身生活はこれが始めてゞはない。けれども以前には處女であつてこれから滿たそうとする希望以外には何にもなかつた。けれども、今の孤獨は腐蝕した果實のやうである。そして、それは火の酒のやうに私の肉體を燒く。本當に妙な殺害である。私の生活には二人の男が這入つてゐた。それが私の生活を豐にし生々(いき〳〵)させた。彼等は饑じくて、喉が渇いて、そして、疲れ苦しんで居る事は確かである。彼等は死人のやうに地の中に閉ぢ込められてゐる。そして、此の瞬間に温かい肉體をもつて活動してゐると私が想像してゐる此の瞬間に彼等は、もう冷たくなつて、つッぱッてゐるかも知れない。ものゝどん〳〵進下つて考へて見ると、戰場に行つてゐる此の二人の男と此處にかうして居る私との間に共通なものは何にもない。』

と云ふかと思ふと、又、

『時とすると、私が目を閉ぢた時、奇怪な考へが恐しい蝙蝠の群のやうに私の上に飛び下りて來る。と云ふのは幾人かの女が、今、この瞬間に温味の薄らいだ床の中で身もだへして居るだろう。物狂はしくなつてゐる女達、憤の遣り場に困つてゐるだろう。夫を奪はれ戀人に行かれてどうしていゝか分らない　くの女達、彼女達はやがて床の上に坐つて頰杖をつくだろう。彼女達は眠られない。女が一人で生活する。一人で寢る、

一人で呼吸すると云ふことは余まりに不合理なのだ。と云つて、又、余まりに固苦しい男女の結合は、結局一ツの牢獄なのだが。……』

と、考へて多くの女の獨身生活を淋しい痛ましい目で眺めてゐます。かと思ふと、又、何と云つた處が「合せしものは離れ者だ。」と云ふ我が國の諺に似たやうなことを云つてゐます。

『私の遺にある夫の手紙は、夜營に付いて、又、十中の九分九厘迄は彼の命が無いことに付いての知らせと、そして、簡單ではあるが私の胸を引き裂くやうな別れの言葉がある。「今朝は彼に迫まる危險がいくらか薄らいだかしら、寒さは減つたかしら、饑じくはないかしら。」かう思ひながら私は私の着物、私の冬の帽子に付いても考へてゐた。』

で、こう云ふ風に結局殉難者がたとへ、自分の肉の肉であらうとも、自分の命迄も打ちこんだ男であつても、時が經過すれば人は其れに慣れてしまうものであることを最初の日には悲しみが自分の頭をかき廻すから愛する者の苦しみを自分も分け前して居ると思ふけれども幾日かゝ經過すれば氣持ちは全く違つて來ると云ふ、殘酷な實在を語つてゐます。

併し、それからの彼女の生活は苦痛が多いと云つたのでは言葉が足りない、苦痛其のものでありました。夫の安否を氣遣つて、居ても立つても居られなかつたり、夫の戰死の報を受けた時の狂亂、續いて愛人の死を知つた時の失望、實に、夜を日に次いで身をもだましひをも搔きむしられ引き裂かれるやうな經驗を續けて居ます。自分の描く夫の幻は温い接吻、生々した色の頰、自然な優しい身振りであるのに、實際には其の夫の手の上、眼の上、其の外彼の體の全體には土がかゝつてゐて、足は乞食の足のやうに灰色に冷へてしまつてゐて、皮膚は浮腫んでゐて、そして、彼の體のどの部分へでも虫ケラが遠慮會釋なく這ひまはつて行くことを思つては戰慄してゐます。

太陽に全く暈がかゝつてしまつたやうな陰鬱な日を悶々として送つて居るうちに或る朝彼女は髮を結ばうとして鏡に向ひました。額に亂れかゝるちゞれ毛をかき上げようとして不圖、彼女は一筋の閃光——最初の

白髮を見ました。驚愕した彼女は猶も精密に自分の顔を見て、目の外側の隅、及び、口の兩方の隅のまはりに唯見たゞけでは氣が付かない位の細い筋が、やがて皺となり皺がつて行く準備をしてゐるし、完全に卵形の顔の輪廓がいつの間にか崩れかゝつてゐるのを發見しました。彼女の驚愕は絶頂に達しました。そして、絶叫しました。

「私の顔が皺くちやになつて髮がうすくなつて目が朦朧として來るなんて、そんなことはないだらう。そんなことはないだらう！　私は大洪水のあることを信じる。落雷があること、不幸があること、埋葬があることを信じる。けれども、私の容貌が變ると云ふことは信じない。此の曲線、此の大理石のような皮膚、此の美しい色をした顔が變らればならぬと云ふことを信じない。私には勇氣がある。平氣で死を迎へる勇氣がある。もし、必要なら私の方から死に向つて行く。けれども、今の美しい自分を拋棄しなければならぬことを納得する勇氣は私にはない。私の命を持つて行つてよろしい、私を打つてよろしい、けれども、私の容貌が變ると云ふことは納得しないッ！』

併し、何と云つた處が、どんなに烈しい言葉を投げつけて反抗した處が私共人間は自然の命令には從はなければなりません。自然け私共の願ひにも小言にも反抗にも決して耳を貸さずに一度定めた法則を一分一厘も違はないやうに實行して行きます。で、もとより聰明な頭の持主である彼女は、やがて、其處を悟るやうです。そして、

「苦痛と云ふことは咽喉をしめる涙でもなく、夜中の唸り聲でもなく、親しい人の葬式の鐘の音でもなく息を止めるやうな嗚咽でもなく、胸の中の情の叫びでもない。苦痛は私達の呼吸のやうに正確で、そして、私達に喰付いてゐるものである。つまり、生きると云ふことが苦痛と云ふことである。』

と云つて苦痛の中に平氣で自分を殺して居るやうになり、そして、其の暗黒の中から今度は人間としての自分の價値を見出して除々と頭を擡げて來てゐます。

處で、前にも云つた通り、彼女は過去百年間の婦人論の産物でありますから、個人の自由と云ふことを紀

對に信じて居ます。そして、彼女の二重戀愛は其處から來てゐます。其れに付いては批評の餘地が充分ありますし、婦人の生活として決して模範とすべきものではありませんが、併し、善と思ふ處へはヅン／＼進んで行くこと、因習の何物にも決して囚はれて居ないと云ふ處には、私共の學ぶべき處があります。殊に、決して、自分の信じて居ない處へ、或ひは、惡と知りつゝも周圍の事情にひきづられて行く我が國の大多數の意氣地のない婦人は彼女から學ぶべき處が澤山あります。

彼女の苦痛のうちには（此處では餘まり長くなり過ぎるのを恐れて御紹介できませんでしたが）個人の自由に重きを置き過ぎて居る結果陥つた二重戀愛、且つ又、母性と個性との衝突も加はつて居ります。で、もし、彼女が婦人の個性と云ふ處に許りしがみついて居ないでもう一歩進んで人道的の立場から自分を眺めるならば其の苦痛が幾分輕減されたであらうと私は考へます。

私の日頃の婦人論は現代の代表的新婦人である彼女から、もう、一歩進んだ處に立場を置いて居るのでありますが。何となれば、彼女の思想で進んで行くならば行きつまるには定まつて居ますから、併し、今日の我が國の婦人の大多數はまだ／＼彼女が來た處迄でも可なりな距離があります。我が國の婦人はまだ精神的の苦しみやうが足りない、餘まりに安々と周圍に屈伏して安逸な生活を貪つてゐます。其の上女性であることの誇りを知らず、實は立派であるものを徒らに恥ぢたり、心を勞して氣を腐らせたりしてゐます。で、私は此の「女」の生活に共鳴したのではありませんが、併し、生氣なき我が婦人界に一服の興奮劑を提供するつもりで因習の弊風に反逆し、潑剌として赤裸々になり終せた此の新婦人を我が讀書界に御紹介したので御座います。

子供の唄

原田琴子

雪を渡る風さむき縁の柱につかまりて、小さき黒足袋をはける足を片足ぴよん〳〵とあげながら、庭の雪を眺めゐる四歳になる子のことば

雪や雪やこんにちは！
雪や雪やなぜお前は
そんなにおしつこをするのだえ
寒いのかえ？
ああ、ゆたんぽをいれてあげようか
母さん雪がさむい〳〵ですと
パパさんがおかへりにこまるでしよ
おむかひに行きましよか坊やと母さんと
母さん何を考へてるの？
何處へ行くの？
はゝかりへ！いやいやいや
行つちやあ駄目、駄目ですよ
だつて坊やがひくわんしちまふもの

やお母さん出てきた
母さん見てご覽
雀がれ
チュッチュッチュッつて
あのお屋根に
ほら見えるでしよ
また飛んだ、飛んでつた
なぜ母さん見ないの
お室へはいつてくの？
見てゐらつしやいよ、よう、坊やと一緒に

フンフンフンなにかたべたいな
坊やおなかゞすいた母さん
いやいや餡ちやんなんぞ！
おせんべも坊や大きらひ
パパさんが銀座から買つてきた
チヨコレートがいゝの
それからおりんごもれ母さん
えゝ赤い大きいおりんご
お臺所へ行つて
庖丁でぱかんと切つて
坊やと母さんと二人で食べましよ
[illegible]や[illegible]やお前も食べたいかえ？



『性の社會的考察』

フィルデング氏著
瀬戸義直氏譯

に附いては一月號に於て充分御紹介するつもりでしたが紙面の都合上其の意を得ませんでした。で今改めて御紹介します。其の內容は獨逸道德の凋落、政府の性教育運動、兵卒に性的の眞理の示教、壯丁の敵——遠征米軍に於る花柳病戰、產業に於る性的衛生、學校に於る性教育、其他の性的衛生運動、產兒制限、新道德、心理解剖、性的保健の基礎としての經濟資格、等健實な性智識を得る好資料であります。原著者の序に次の一節があります。

今や喫緊なる性の諸問題を數時代の病的な闇黑裡から白日裡に曝さうといふ決心で、人類の安寧幸福を增進せる上に非常な長足の進步が行はれて居る。なるほど、他のものよりも一層遠大なる價値があり、一層深遠なる意味を持つところの社會的福利に對する貢獻と名づけることは困難であらう。たゞ我々は、個人の性的本能や情緒が根深くして、抑へることのできない性質のものであるとか、又それらのものの社會に對する影響や反應を覺知する時に、初めて、この方面に多大のなすべき事が含まれて居るのを認めるのである。

我々の新しい觀察に導かれて、近代科學の方法や常識の原理は、遂に、我々が古老から受け繼いで來た最も劫掠的な疫病に適用されて居る。この禍患——花柳病——は性の問題と結びつけられたために、神祕の中に包まれ、慎ましげぶりといふ禁制に遮ざけられ、そしてその結果たる闇黑裡に榮えて來た墮落した本能と低下した情熱とによつて保護されて居たのである。

たゞ過去數年間に、性質に於ては革命的で、範圍に於ては世界的な、劃時代的變化があつた。神祕の上衣は容赦なく引裂かれた。慎しげぶりといふ蔽ひは虛僞の、ごまかしの心的狀態として曝露された、そして個人的にも社會的にも破壞性を帶びた結果を伴つた。眞理の門が開かれ、防腐性の赫燿たる光が、疾病と腐敗との、何代か養成された地面を照すべく齎されたのである。と。

マルサスの惡魔

ジヨン、レーアード

一

『十八世紀以前の人は概して空虛な望みを造つて安心してゐはしなかつたけれども、十八世紀の後半に至つて一般に人は空想を描いて安逸を計り始めたのでマルサスは其の狀態を警戒するために惡魔を現した。で、半世紀の間は凡ての眞面目な經濟論が其の惡魔を見つめてゐたが、併し、其の次の半世紀の間は其の惡魔はすつかり鎖に繋がれてしまつてゐた。處が、今、又、其の惡魔が鎖を切つて出て來たようだ。』

こう云ふ言葉でキーン氏は平和締結後の禍患に付て考ふることを讀者に迫り、そして、自分自身も、平和復活後の歐洲が以前よりは立派により美しくより雄大になるだらうと言ふ樂天主義を消散せしめようと努めてゐる。實際、今日の狀態ではマルサスのあの悲觀論が脅威であるのも無理はない。マルサスがあの悲觀論を書いたのは丁度今と同じように人々が生活困難に陷つてゐる時であつた。其の

點は今と同じようである。

實際、物資が少ないと稱するのみならず、其の價格が非常に高い今殊にさうだ。で、此の生活費が高いと云ふこと、燃料や食料品の拂底と云ふことが人をしてマルサスを思ひ起さしめたのである。のみならず、今は生活困難に加ふるに結核病の蔓延があるので、或る意味に於てはマルサス時代よりも今日の人々の方が不安の度が一層强いだらう。其處で、人口過剩は異に恐るべき原因から來てゐるか、それとも、豐富な生活の結果であるかを明瞭に見極めなければならぬ時が來たのである。

大抵の人が知る如く、マルサスは無政主義者ゴドウヰンが信じてゐた人間の完全性やコンドルセーの樂天主義を一個の狐火に過ぎないと云ひ、其れを證據立てるためにあの人口論を書いたのである。彼は云ふ。貧乏は絕へない。なぜなら、稼ぐに追ひ付く貧乏がある。つまり、人類が稼ぐ力よりも人口が殖へる力の方が多いと。全人類の何分の一かの少數の人は自分自身と自分の家族の生活資料を十二分に所有してゐるが、併し、大多數の人間は其の日暮しである。にも拘らず家族の數はズン／＼殖へるから不幸は絕へない。なぜなら、不幸とは缺乏の別名である。其處で、無限な人口增加を防止するものは惡德、役病、叉は、戰爭と云ふことになる。それは、誠に無情ではあるが、必然なる自然の法則である。と。

けれども、マルサスは彼の人口論の後の版に於て、其の悲觀主義を或る程度迄變更してゐる。則ち、道徳的抑制によつて人口過剰は防止出來ると云つてゐる。たとへば、一家族を扶養する資格が自分に出來る迄は結婚を控へるとか、其の資格が無いと思へば獨身生活をすると云ふようにするならば、たとへ、貧乏の全部は取りきれなくても、とにかく、餘程減少すると云つてゐる。そして、其の道徳的抑制は敎育によらなければならぬことも說いてゐる。此の點に關してはミルも彼の經濟學に於て、不節制の結果の子澤山は他の不節制と同じように社會を亂すものであるから罰すべきものである。そして、其の不節制を矯正するものは敎育によらねばならぬと云つてゐる。

マルサスは、又、結婚を延すことや獨身生活は人口過剰の禍ひに比較するなら其の害は些細なものだと想像してゐるのであるが、處で、其の道徳上の抑制と云ふのは貧乏と云ふ恐れを基礎とした用心であるから、少しも貧乏と云ふことを心にかけない下級な人間は矢張り不用意のうちに多くの子供を持つてしまう。

其處で、マルサスは人口論を書いた。抑制の必要が確かに其處にあつたからである。けれども、十九世紀の後半に至つては其の必要がなくなつた。耕作し得る土地の發見、新しい食物の發明がマルサスの現した惡魔を消してしまつたのである。其の結果、亞米利加、濠洲の人口は

非常に増加し、獨逸や英國の人口も或る程度迄は増加した。

そして、又、一方には宗教家や帝國主義者は人種自殺と云ふことを非常に呪つてゐた。米國先々大統領ルーズベルトの如きは亞弗利加猛獸狩りの歸途、人口が少しも増加しない佛蘭西へ立ちよつて人口増加を奬勵したりした。

人口増加の奬勵はいろ〳〵の動機から來てゐる。他國に對して自國の勢力を維持するためと云ふのがあるし、又、上中流階級の人數を多くして、いつも人數の多い所謂プロレタリアアツトに對抗しようと云ふ望みから來てゐるのもあるし、或ひは又、道德上の理由から、小家族を望むのは利己主義のうちの最惡なものだ、それは、母としての訓練を受けることを拒み、自然の義務を拾て、本能の慾望を滿たそうとする誠に醜い工夫だとして攻撃する。そして、さう云ふ意見に對しては、いつも、社會主義者、デカダンの美學者等が相當な反駁論を試みてゐた。けれども、マルサスの原則は少しも引き合ひには出されなかつた。マルサスの原則が重大視されてゐなかつたからである。

二

處が、今日、マルサスの人口論は引ッぱり出された。マルサスの邪魔が歸つて來た。けれども、其の議論の調子は變つて來た。則ち、以前には、臺所に許り居たものが、今度は客間の方へ這入つて來た。つまり、云ふことは露骨でも、話が

客間的のものになつて來たのである。そして、以前の悪魔のように人に喰ひ付きはしないけれども、併し、其の力は以前よりは強い。で、或る論者の如きはマルサス自身よりも一層マルサス的になつてゐる。そして、さう云ふ論者は云ふ。『産科醫のお客が多くなればなる程、葬儀屋の仕事が多くなる。併し、そんなことに一般人の意識は關係しない、子供はどちらにしろ生れる。生活し得る場所があらうが無からうが生れる。』と。云つてマルサスの道徳的抑制の方法をも一掃してしまう。もし、さうならば、マルサスが後に云つた『道徳的抑制』によつて人口過剩を防止しようとする考へが這入る餘地はない。そして、マルサスが前に云つた原則に從つて結局遠い未來に於て、缺乏惡徳、疫病、又は、戰爭によつて人口増加は防止されねばならぬと云ふことになる。

　であるから、今は、マルサスの原則を一層緻密に研究する必要があるが、併し彼の人口論は多くの點に於て我々を失望させる。彼の議論の正確さ、明瞭さに於ては申分ないが、併し、其の正確さ明瞭さに内容が伴つてゐない。彼の論旨は次のやうになる。『人口は打ち捨てゝ置けば幾何學的に殖へ、そして、食物は算術的にしか殖へない』と。して見ると人口は四五時中制限して居なければならないと云ふことになる。食物は到底不足になるのであるから。そして、人口を制限する

方法は道德的抑制、則ち、消極的の方法か、さもなければ積極的の方法、則ち、戰爭か役病か饑饉で防止しなければならないと云ふことになる。

けれども、此の議論の大部分には缺一がない。人は食はねば生きることが出來ないのを誰でも知つてゐる。併しながら安價な樂天主義は一人の健康な人はどれだけのカロリーを要するか、又、どの位ひの分量を必要とするかを問はない。故に、マルサスの議論は精密に調べて見る必要がある。なぜなら、マルサスはゴッドウインやコンドルセーのように、此の問題は人間進歩の上に遠い〱影響しか持つてゐないと云ふことを抗んでゐた。人口增加防止の方法に關してのマルサスの組織的な詳細な說明は實に努力したものである。併しながら、もし、彼が人口の增加と食物の增加の差を幾何學と算術との差で云ひ現さなかつたならば其の當時の人は其れを痛切には感じなかつたらう。

そして、今日の產業狀態を知つてゐるものは、食物が算術的にしか增加しないと云ふことを信じない。なぜなら、人間生活に必要な物資は食物と、燃料と着物である。其のうちで、魚類鳥類家畜、又は、穀物は人爲的の阻止さへなかつたなば矢張り幾何學的な比例で增して行くものだ。

處で、石や石炭はマルサスも云ふように、幾何學的にも算術的にも、何にも增

加するものでない。これは使へば使つたゝけづゝ減じて行くものである。けれども、他の見地から見るならば、石や石炭の供給は運搬の方法によると云つてよい。そして、此の運搬の方法は人口の増加より遙かに早い速度で進歩してゐる。

それ故、マルサスの抽象論は唯數學的の單なる想像である。そして、其の想像は當らなかつた。マルサスは一國の富は其の農產物にありとして、農業以外の人間が寄生虫であることを恐れてゐた。そして、今日の農業の大進步を想像して居なかつた。今日の英國の農產物は英國人の食料としてはあつても無くてもよい程度に英國人は輸入品を使用し得ると云ふことに付てもマルサスは考へてゐなかつた。又、マルサスが人口論を書た當時、英國には荒地が澤山あつたけれども、併し漸減法に脅かされて、其等の土地から大したものが產出されると云ふことは知らなかつた。其の上に肥料と云へば牛の糞許りだと思つてゐた。土地を牧場にすることは、耕作するよりも無駄であると考へてゐた。其の狹い見地から彼は次のような結論を下したのである。『工業の英國が一代のうちに農產物を二倍にすることが出來るならば其れは立派な成功であるけれども、其の次の一代のうちに又其れを二倍にすることは全く不可能事だ。』とこれが彼の數學的の議論の全部である。實に、正確ではあるが、併し、事實には合つてゐない。

人口の增加が幾何學的であると云ふことですらも、多くの人が信じて居るようなものではない。幾何學的であつても無くてもとにかく人は永久に子を生むだらう。人口增加は時の問題である。鼠や兎が其の繁殖力を抑制されなかつたならばいつか、一度は此の地上は鼠や兎で一杯になつて、そして、ツイには空氣の缺乏のために短時間のうちに彼等が皆斃死するであらう、と云ふことは想像される。それと同じような氣持ちをマルサスは世界の人類に持たせた。確に、理窟に於ては其れに相違ない。

同時に、我々の利益のためにマルサスが努力した或る外の眞理を此處に考へて見なければならない。食物增加に付ての

彼の數學的の比例は作り話ではあるけれども、併し、子を生まうとする衝動が此のまゝに繼續するならば、永久に人間に割りあてられた食物を犯すことになる。食物や燃料が不足になれば、いつも、自然が干渉して、そして、人間のために悲慘が這入つて來る、英國の煙のない田舍と云ふ夢は、さうなつた前條件を忘れた時にのみ愉快に感せられる。そして、小說家はいろ〳〵の造り事をして其の前條件を葬り去るけれども、自然はさう手ツとり早くはものを葬らないから、其の仕方はのろ間で殘酷である。

人口を制限することは十年前には罪惡であつたかも知れない。そして、今は其れが義務であるかも知れない　故に、此の

根本的な難しい問題を遠くから見ようが近くから見ようが、人類は貧乏や役病や饑饉によつて人口を制限されるよりも、もつと穏やかな合理的な方法で制限出來るか出來ないかと云ふのが問題である。

生殖的の衝動の力を弱めることによつて、さうせずに解決しようとしてゐる企圖を無にすることはよくないことだ。凡ての證據が其れに反對してゐる。生殖慾は抑制しなければならないものである。饑饉や病氣ですらも其の慾を消さない。奢りと云ふ人の精力を鈍らするものでも其の力を減らさない。性慾は實に頑固なものである。であるから、性慾はいつ迄も續く人種の根で個人は、唯、一時的の薬であると云ふことを思はさしむる程だ。かう云ふ事實は出產率の減退を悲しむ人達には愉快だらう。實に、大洪水が來て人類が流されても、たゞ、二三の男女が殘つて居さへすれば此の地上には忽ちのうちに人間が植へ付けられるに相違ない。或る階級とか或る國民とかの願いて行くのは別問題である。貴族や或る國民が自分等の權力を維持しようとするならば、他の階級と又は隣國と步調を揃へなければならないけれども、併し、其れは人種其のものとは別問題である。故に數世紀間の出產率の停滯や減退は人種の立場からは心配する必要はない。

其處で、殘つた問題は人口制限の問題だが、此の根本問題を人間が支配することを學んだならば、此の世界が改善され

ると云ふことは容易に想像出來る。けれども、其れは、人爲的の制限を直ちに贊成すると云ふ意味ではない。もし、戰爭に勝つた國が負けた國の國民を奴隷にしたり、絶やしたりする方法を用ゐるならば、世界の人口は一時は容易に調節出來る。けれども、さう云ふ國民は、又、自國の人口が過剩になれば國內で階級的鬪爭によつて、又、調節しなければならなくなるだらう。さうなると其の惡魔はマルサスの惡魔よりも一層惡い。

三

又、優生學者の理想に反對する人の議論は甚だ明瞭を缺いてゐる。つまり、優生學に反對する人は種馬農場を嫌つて野生の方法がよいと云ふのである。人口過剩で饑じい生活にはローマンスはないがたとへ、外見は立派でなくても原野にはローマンスがあると云ふのである。故に優生學的な制限は人種のために最善なものであるかも知れない。又、同時に最惡なものであるかも知れない。

今日の優生學の智識は甚だ貧弱であるから、優生學者は心身虛弱な者や衰頹した者に避姙を勵める位ひに止まつてゐるからよいが、もし、優生學者にもつと智識があつて、そして、權力があるならば却つて危險が多いかも知れない。人間と云ふものは非常に複雜なものであるから人間が造られるに付て、もし、二三の缺點でも明らかになり、其れが除去される方法や、又は、望ましい傾向を如何にし

て强むべきが發見されたならば、其れは大したことである。けれども、優生學者が今持つてゐるだけの智識で彼等が思ふような事をしたならば、其れは無限な害を殘すことになる。彼等は永久に多くの人間の資格を破壞してしまうかも知れない。なぜなら、彼等はジャームに於ける人間の價値を認めることは出來ない。さうなると、矢張り、人工を加へるよりも自然の方法に任せて置いた方がよいと云ふことになる。

けれども、人間の智識の範圍內に合理的な人口制限の方法があるかも知れないとは云つても、勿論、如何に合理的と云つても完全なものではないだらう。なぜなら、それは非常な抑制を必要とするから。そして、其の抑制のうちには必ず禍が潜むであらうから。現代流行の心理解剖家が此の制限に付て聞いたならば、聞いたゞけで喫驚するだらう。併し、彼等とても人間が猿と同じように好色家であることを認めてゐるだらう。故に、彼等が喫驚するのは間違つてゐるのだ。もし彼等の平生の主張が間違つてゐないならば、人間と云ふものは一人前になるズット以前から神經衰弱病者である筈だ。故に、如何なる場合ひに於ても、善を求むるために、比較的小さい禍は止むを得ない。そして、此の抑制の禍は先づ我慢の出來る禍である。私としても、さう云ふ抑制と云ふことを避けられるならば避けたい。けれども 想像するに人爲的な制

限も道徳的の抑制と同じ仕事を爲すのは明かである。そして、其れが惡いと云ふのは要するに意見の問題である。確に嬰兒殺しや墮胎は辯護する餘地はない。併し、避姙はまだ議論の餘地がある。

けれども、避姙に對する非難の重もなるものは、其れが子に對する慾求と性慾とを切り離してしまう處にある。そして人種の幸福を保護するための子に對する慾求の力を弱くしてしまうと云ふことである。が、とにかく、我々は其等の二ッのうちのどちらかを選まなければならないと云ふ問題に對しては嫌惡の情を禁じ得ない。そして、それは、人間性に秀越な基礎をもつてゐる。そして、子供に對する我々の慾望は非常に强いものだ。どの位ひ强いかは誰にもはつきり分らないけれども。出産率を任意に制限することに於ての直接の變化の見込は差し當り大したものではない。此の場合の性質上、これを決定するものは人々が一般に其れを實行するかしないかによつてゞある。けれども、今日に於ては人類の過半數が此の問題に對する議論をよく了解してゐない。又、議論などでは動かない。つまり、文明國に於ける輿論と個人の實際行つて居ることは餘に深くは變化しないと云ふことを私は意味するのだ。

勿論、用心深い人は結婚してから子を持つた後の生活に付て考へる。けれども慾しいことにはさう云ふ用心深い人は誠に少數である。そして、實際の狀態は發

人子供を造るかと云ふことが問題でなく、造られてしまつた子供の數が問題である。故に、近い未來に於ても貧乏人は子澤山で、そして、其の子供の養育はどうしても國家がするか、又は、慈善によることになる。して見ると、目下の急務は、物資供給の増加である。もし、さうしないならば、自然は最も亂暴な慘酷な方法で人口を制限することになる。そして、人命を長くする醫學上の智識も、弱い人間を攻撃する新しい病氣のために差し引かれると云ふことになる。其の上に經濟上の今日の狀態が續く以上は、世界には貧乏人の數が依然と多くて、そして不幸な死の時間を唯伸すために苦役して居るだらう。たとへ、經濟力が資本家の手からプロレタリアットの手に移つても彼等は貧乏な苦しい狀態から逃れることは出來ない。唯、プロレタリアットの內容が進つて來るだけで、其の外の變化はないだらう。

　勿論、物資供給の増大は近い未來に於て可能である。我々は今日マルサスと同じように非常に不幸な時代に生活してゐると考へる。けれども、それは、唯さう考へるだけで事實ではない。戰爭は確かに我々の餘裕を使ひ盡して多くの物資の供給の源を危ふした。けれども、全體に於て、戰爭以前に利用してゐた供給の可能性は近いうちに復活すると云ふことを想像しても不都合はない。地上は充分豐富である。勞働力も決して減退してゐな

い。恐らく、又、各國の政府は今迄よりも一層廣い考へを實行するだらう。或る新しい國、又、或る工場町の人口の增加は素晴らしい勢ひであるが、併し、それは單に一局部であつて、人口の非常な增加は決して世界的ではない。

たとへば、いつもゴチャ〳〵してゐる印度や支那に於ける人口も四倍にはなつてゐない。そして、タスマニアやゴンチの國民の如きは實に全滅してしまつてゐる。猶、全體に於ては未だ〳〵物資は澤山だし、又、殖へる見込みもある。

二三世紀を見越すならば此の問題も變化するだらう。併し、其の時ですらも此の問題の性質が變つてしまうと云ふことはないだらう。前にも云つた通り、人間の必要品と云へば、食、衣、住に使用するものである。そして、其等の物資の供給は、今日の世界の人口が先づ想像通り增加しても不都合ない程に充分であるには相違ないが、併し、無限に充分であると云ふことの證據はない。けれども、「人は立つだけの場所があれば、其の足の下に彼の生活資料は充分含んで居る。」と云ふ言葉があるし、且つ又、人が穴居者となるならば家の問題は自然と解決する。さうなる迄にはまだ〳〵莫大な時間もある。衣服は長つゞきのするものであるから、食料問題と比較するとこれは小さい問題だ。

石炭や、石油や、薪の問題は一寸困難である。我々の燃料が其れに限られて居

るものだとすれば今日の文明は到底長くは續かない。何故なら、前にも云つた通り、石炭や石油は増加する性質のものでないから。けれども、これとても、電氣やギアスの發明で補はれてゐる。其のうちには、又、外の種類のものが發明されるかも知れない。

　であるから悲觀論者は彼の說を徹底させることは出來ない。現代は實に、其等の事柄に關して非常に冒險的な企圖をしてゐる。そして、恐しい危險を冒してゐる。今現に持つて居るものを如何に最善に利用すべきと考へることの代りに、他の燃料の新しい發見を問題として賭博をして居る。併し、其の賭博は成功するかも知れない。もし、それが成功すれば未來に對する問題は唯食料だけである。そして、これも、亦、見込みは悲觀すべきものではない。雪に閉ぢこめられる寒國でも短い夏の間に小麥の收穫があり、南米や亞弗利加に豐饒な土地が有り餘まつて居る以上、又、地球上には灌漑さへすれば收穫は無限である土地が豐富に有る以上は食料問題に付て悲觀する必要はない。又、クロポトキンも云ふように、まだ、インテンシブな耕作法は充分に利用されて居ないのである。多くの土地はこれから耕作し得るようにしなければならないが、併し、それには科學が目を見張つてゐるから、其の手段は容易に見出せるだらう。

四

未來の人類の住所としての此の地球上を考へた時には二三世紀乃至二三千年は短いものである。そして、又、最も樂天的な假設論をもつてしても人口は無限に增加するものではない。が、結局は人口問題は矢張り、人間自身が制限するか、自然に制限して貰ふかになるだらう。此のより大なる見地から考へて見ると人間の幸福は矢張り其の社會の全員の抑制する可能性によるものだ。けれども、兎に角く、今日の智識では此の人生と云ふ大きな船の梶を取ることは出來ない。併し其の梶をとらねばならぬ必要を了解する時が來るだらう。其の資格が出來る時が來るだらう。其の時には人間の智識が人類の幸福を保證して自然の方法を押し除けることが出來る。

有識な意見が、此の問題を左右することは出來ないと云ふ意見を持つてゐる人は勿論此の種類の可能性のあることを抗むだらう。併しながら、さう云ふ人の云ふことは少しも我々を納得させない。

食物があるだけ、それだけ口があるとして、一部の自覺した人々が人口を制限しても無自覺な人々は少しの用心も何等の用意もなくどん〳〵子を生むと云ふことは事實である。其處で、今日の少數の自覺した人々が持つてゐるやうな高尚な動機を一般人に持たせることが出來るかどうかが問題である。

が、思ふに、其の動機は非常に强いしそして、其の動機が一般になるであらう

と云ふ社會の狀態も考へられる。
　さて、其の自覺した人々の持つてゐる動機とは何であるか？　其れはプライドとペヂーである。さう云つたならば用心と云ふことと利己主義と云ふことを一ツにして考へてゐる人にとつては馬鹿氣たことに思へよう。けれども、決してさうでない。たとへ、無茶な生殖が利己主義でないとしても（そんなことはないが）親が自分の子供に對して直接の責任を持たないならば、其の場合ひには用心も亦利己主義もないわけだ。で、其の責任はプライドとペチーを含んでゐるのである。
　子供が社會の厄介になるならないを更にかまはないならば無茶苦茶に親になることを妨ぐものは何にもない。單なる理論的のマルサス主義を實行する外は。
　中流階級や熟練工に子供が少ないのはマルサス主義のおかげではない。して見ると人のプライドと云ふものがなか／＼有力である。同時にペチーと云ふ感情も勢力がある。婦人が子供を生むと云ふことは非常な苦痛である。故に、男にしろ女にしろ或る習慣や、又は、神秘的な命令のために其の判斷を誤まつてゐないならば、出來るだけ負擔を輕くしようとする。女をまるで男の奴隷と思つてゐる人は女を子供を生む機械だと思つてゐる。女も又其れが運命だとあきらめてゐる。
　けれども、プライドとペチーは强い力で、そして、これは敎育出來る動機であ

る。今日の社會に於ては、其等の動機は誠に貧弱で有効には働いて居ないけれども、併し、社會の心理狀態は個人の心理狀態と同じく、固定して居るものでないから、此の問題に對する思想の變化によつて、其等の動機を豐富にする可能性はある。

他の事柄に關して用心深い人は親となるにも亦用心深いものである。人は用心深くあらねばならぬ理由を知るならば必ず用心深くなる。用心深くあらねばならぬことの理由を大多數は知らないので用心をしないのである。で、大多數の人間が用心深くなるならば人口の調節も自然出來て來るに相違ない。

けれども、其の變化がどの位ひ早く來るかは分らない。又、變化が來たとしても國民によつて其の影響は違ふ。恐らく野蠻人には影響しないだらう。野蠻人の頭の動き方は餘まりにのろまである。野蠻人は自然に從つて、そして、自滅する。けれども、文明人は自然を制裁する。

確かに、大多數の人は不用意で、無頓着で、愼しみがない。で、如何なるものも此の狀態を變へることは出來ないと云ふ人がある。もし、さうならば其れは止むを得ない。結局駄目である。併し、さう云ふ意見は眞理ではない。民衆は餘まりに望みなき狀態に居るので自分自身を改良しようとする餘裕がないのだ。けれども、比較的短い間の豐作が社會に於ける權力を變更し、分配を公平にするには

充分長い。つまり、大多數が未來に對して準備するには足りる。

故に、ブライドの力が未來に於て、重用な役目を持つて活躍するようになる。同時に、ベテーの勢力も偉大になる見込みがある。又、世界は婦人の解放から多くを豫想することが出來る。何となれば解放と共に力が現れる。そして、婦人の常識は確かに男の氣の毒と云ふ氣持ちを強くし、そして、生めるだけ生むのが女の義務だなど云ふ男の觀念を破壞することになる。母性は實に榮光であり、特權である。其の理由の一ツは危險であり、苦しみであるから。

もし、婦人が、優生學が奨勵するように二十年　三十年もの間、毎年か又は二年目か三年目に子供を生まねばならぬと云ふならば其れは確に禍である。さう云ふ生活は婦人にとつては苦しいこと恐しいことの代用に過ぎない。それは人としての修養、婦人としての餘裕、妻としての伴侶を失つてしまうことになる。とにかく、三人か四人の代りに二十人も子供があつたならば、それこそ多過ぎるに相違ない。數の多いことが幸福のために重用であると云ふことを聞く時に、それは到底解けない倫理の問題になつてしまう。

社會の理想は最大數の最大幸福であると主張する英國の昔風の功利論は、勿論十人よりも二十人の幸福の方が、國家から見て價値が二倍だと云ふだらう。けれ

ども、私は其れを信じない。功利論者の議論でも其れを支那や印度へ持つて行く必要はない。これに反して、常にユートピャを造らうとして居る人は幸福な都と云へば人口の少ない小さい都を云ふ。彼等は數よりも質に重きを置くと云ふ。併し、此の考へは其の反對の考へと同じように承諾し兼ねる。

質が善い以上は、文學にしろ、藝術にしろ、人間にしろ、有り過ぎて困ると云ふことはない。質が善い以上は多ければ多い程好都合である。又、數量が役に立たないと云ふならば、何故に、日の長さが重用であらう。此の問題に關する數量の增加は、凡ての他の場合に於ける數量の增加と同じ基礎の上にあるのだ。

其處で、人口調節問題の倫理的の價値は少なくとも今は二ッに分れてゐるが、いづれにしろ、人間は自分等の數は必ず制限されねばならぬと云ふ事實を悲しのむは早過るだらう。

本誌定價表

一冊	金二十五錢	送料五厘
六冊	前金　金壹圓四十錢	（送料共）
十二冊	前金　金貳圓七十錢	（送料共）

雜誌代及郵税は前金の事御送金の際は振替貯金東京五三六八八番に御拂込みのこと郵券代用は五厘切手にて一割增御廣告は御照會次第御相談いたします

大正十一年二月二十三日印刷納本
大正十一年三月　一　日發　行

東京四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉
東京神田區仲猿樂町十七
印刷人　大杉直次郎
東京四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會社
振替東京五三六八八

山田わか女史著　最新刊

女　人　母

四六版本製
三百五十頁
裝禎美裝
正價金壹圓七十五錢
送料八錢

『家庭の危機』以下二十五編悉く女として人として母としての自覺を經とし、家庭生活の高調を緯とし、婦人勞働、女子教育及び戀愛と結婚を最も健全な人生觀、則ち社會學的見地から織り込んだものが此の新著である。最も進歩した婦人の立場から此の文明批評は確かに不健全にして有害な多くの婦人論を一掃する。

山中峯太郎著

姉妹の胸へ

好評三版

定價一圓五十錢（送料八錢）

姉妹の胸へ！より崇く新しき愛の胸へ！この書に含めるいのちありと信じてさゝぐ

發行所
東京市本郷區春木町二丁目
振替東京八二一九
森江書店